

平成30年度第2回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時 平成31年2月14日(木) 午後2時から4時

会 場 新潟市美術館 講堂

出席者

(委員) 会 長	中山 輝也	新潟県博物館協議会会長
	今井 悦子	新潟市美術協会参事
	大倉 宏	美術評論家
	金山 喜昭	法政大学キャリアデザイン学部教授
	島 敦彦	金沢21世紀美術館館長
	田中 咲子	新潟大学教育学部准教授
	東村 里恵子	フリーアナウンサー
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸員
	田宮 佑子	公募委員
	茂木 美智恵	公募委員

(事務局)	前山 裕司	新潟市美術館館長
	高橋 剛	同 副館長
	松沢 寿重	同 課長補佐(学芸員)
	高橋 良子	同 総務係長
	荒井 直美	同 学芸係長(学芸員)
	横山 秀樹	新津美術館館長
	山口 穰	同 副館長
	小林 一吉	同 主査(学芸員)
	奥村 真名美	同 副主査(学芸員)

次 第

- 1 部長挨拶 文化スポーツ部長 中野 力
- 2 開会挨拶 新津美術館館長 横山 秀樹
- 3 議 事
 - (1) 新潟市美術館及び新津美術館 平成31年度事業計画について
 - (2) その他
- 4 その他
- 5 閉会挨拶 新潟市美術館館長 前山 裕司

1 部長挨拶

(中野部長)

今年、5月に元号が変わる新しい幕開けの年となるが、新潟市もこの1月1日に開港150周年の記念の日を迎え、特別な年ということで取り組んでいる。また、昨年11月には、2002年から16年間市長を務め、開かれた美術館を目指してやってきた篠田市長が退任し、中原市長に替わった。中原市長は年頭のあいさつで、この節目の年を政令市新潟の第2ステージの初年度と位置づけて、今まで以上に行財政改革に取り組む、また、新潟のまちを安心安全の土台の上に活力のある都市、80万市民が幸せを感じることでできる豊かなまちにしたいと表明した。このような市長の方針のもと、私たちもこれまで進めてきた文化芸術が有する創造性を活かしたまちづくりを、より一層推進していかなければならないと思っている。

今年度は、秋に国民文化祭・全国障害者芸術文化祭が新潟で行われる。来年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、文化プログラムに取り組むことももちろんだが、新潟市ではフランスとロシアのホストタウンとなっており、ロシアの新体操、フランスの空手の合宿の誘致が、ほぼ決定しているという状況である。

本日午前中に、市長が来年度の予算案を発表し、来週からは市議会も始まるが、非常に厳しい財政状況になっており、両美術館の予算も決して潤沢ではないが、両館の事業について皆様から忌憚のないご意見をいただきたい。

2 開会挨拶

(横山館長)

平成31年度の両館の事業について、忌憚のないご意見をいただきたい。

3 議事

(中山会長)

この協議会は、両美術館のより良い運営を築くために立ち上げたものであるが、回を重ねるごとに両館ともかなり充実してきており、いい傾向だと思う。忌憚のないご意見を出していただきたい。

事務局から資料1、資料2及びパワーポイントの画像により新潟市美術館の平成31年度の事業計画について説明。

続いて、事務局から資料3、資料4及びパワーポイントの画像により新津美術館の平成

31 年度の事業計画について説明。

(中山会長)

まず、新潟市美術館について、質問、意見をいただきたい。

(東村委員)

中原市長の文化芸術に対する理解の度合いはどうか。また、新潟市美術館の開館時間を実験的に短縮するという説明があったが、1時間短くすることでどれくらいの経費削減を見込んでいるか。目標があるか。現在、午後5時から6時にかけて利用する方はどれくらいいるか。

(中野部長)

前の市長は文化全般にわたり非常に積極的だった。水と土の芸術祭は、昨年の4回目をもって一区切りという方針になっており、今までに比べると大きなイベント的なものは若干抑え気味になると思うが、市民の皆さんの文化活動への支援や生活にうるおいを与えるということについての理解は、お持ちであると考えている。

(高橋副館長)

開館時間短縮の社会実験についてご説明する。過去の実績として、平成28年度の企画展の観覧者は、午後5時から6時の間は通年で全体の0.6パーセント、冬場の12月から3月は0.32パーセントで、つまり通年では1,000人に6人、冬場は1,000人に3人の割合である。平成29年度も同様に通年で0.9パーセント、冬期で0.14パーセントということで、1,000人当たり9人、冬場は1,000人当たり1人強である。今回の社会実験は、実際に閉館時間を6時から5時に繰り上げた場合に、お客様からどのような反応があるかを調査するものである。経費の削減については、警備、受付、看視、清掃の人員費、暖房費を中心とした光熱水費について、通年ベースの実績を46日間で割り返すと約62万円の削減を見込んでいる。この削減により開館日数を何とか例年並みに維持したいと考えている。先ほど部長からご説明したとおり厳しい予算の中で、業務委託分の人員費の上昇分や10月からの消費税アップ分を吸収していく必要があり、このような社会実験を実施したいと思っている。

(降旗委員)

新潟市美術館のコレクション展は、私たちの美術館にとっても非常に学ぶところが多く、コレクションをととても有効に使って、テーマ設定も非常にユニークである。今年も企画展との関連も考えられている。

企画展は、平成31年度は建築デザインとアメリカというものが大きな見え方になってくると思う。インポッシブル・アーキテクチャーは、今、埼玉県立近代美術館で開催中だが、

最近、美術館での建築展、デザイン展はとても人が入っている。目黒区美術館も場所柄、建築とデザインというものを積極的に開催しているが、絵画系に比べると圧倒的にカタログの売上げや有料入館者数が多い。そういうところでは、バランスを取るのにはとてもいい企画だし、新潟市美術館は何と言っても前川國男さんの設計なので、建築デザインをテーマにすることは非常にいいことだと思う。普及活動も、もう少し外に出たり、建築展での松隈洋さんの講演会はいろいろなところでやっているの、広がりがあれば良いと思う。前山館長は、前の埼玉県立近代美術館の時から広報関係やネットワークづくりが非常に得意なので、来年度の展覧会で何か新しい提案はされたのか。

(前山館長)

インポッシブル・アーキテクチャーは、私が埼玉県立近代美術館にいたころから仕込んでいた企画なので、どの立場で話していいか難しいが、新潟としてはゆかりの前川國男、村田豊を展覧会に加えてほしいと要望して、了解され、前川國男の東京帝室博物館のプランなども出品されることになった。

また、実際にできるかどうか分からないが、「市内の建築ツアー」をできたらいいという話はしている。埼玉にいたころ、建築ツアーには高い倍率の応募者があり、有料でも毎回、抽選になった。新潟でもおもしろい建物がたくさんあるので、そういうことができるかと思っています。

(今井委員)

10月の市展について、昨年50周年を迎えたが、会員が年々減っており、5年前に比べると100名ほど減って、今は450人ほどになっている。市展の会期について、前期5日間、後期5日間になっているが、2日くらい延ばしてもらえないか。7部門が二つに分かれており、2回足を運ぶとなると5日は短いという声がある。

(高橋副館長)

市展については実行委員会組織で運営しており、文化政策課がその所管課のため、委員からのご意見・ご要望を伝える。

(今井委員)

私たちが会で煮詰めていきたいと思う。

(大倉委員)

今は、公立美術館は財政的に厳しい時代だと思うが、その中で両館がとても工夫をしながら企画を考えていることは、毎回強く感じている。新潟市美術館の企画展の予算も、私が勤めていたころよりもすごく少なくなっている。いろいろなテレビ局などと共催して、この美

術館でやれる規模の展覧会を工夫しながら考えている様子が伝わってくる。

最初にこの会に参加したときにも発言したが、地域にいる生きた作家たちをもう少し紹介する面が膨らんでもいいのではないか。新津美術館は前々から取り組んでいるが、今回、「あたらしいかたち新潟県人作家展」、「西蒲区の隠れた名品展」という展覧会を企画してもらいうれしく思う。

新潟市美術館のコレクション展は毎回いろいろな切り口で、行くたびに非常におもしろいので、最近では企画展よりもコレクション展が見たい。2回目だが今日も見た。新津美術館の取組みも、さらに切り口を工夫して、地域の方に地域の美術を紹介していくと、さらにおもしろい内容になるのではないかと思う。ちなみに私が今いる砂丘館と、近くにあるNSG美術館では、来年の秋に「明るい色」というテーマで、三条に住む馬場まり子さんというとてもおもしろい、今70代の作家と、岡田清和さんという妙高市のはり絵の作家と、もう一人新潟市生まれの若い画家片桐翠さんの3人展をやろうと思っている。予算が限られた中でも、切り口次第で地域の作家をかなり魅力的に紹介できるので、今後、そんな形で、地域の作家を紹介する企画展に取り組んでもらうととてもうれしい。

以上、質問ではなく意見である。常設展示室の広さについて、改めて考えたことがあり、また後ほど発言させていただきたい。

(金山委員)

学校と美術館の連携はとても大事なことだと思う。新津美術館の出前美術館は、学校数がとても多いため、申込み状況に応じて作家と一緒に学校へ出向いているという説明だったが、新潟市美術館の対応はどうなっているか。また、今日、常設展を見たが、子どもたちが無作為に作品を選んで展示する取組みがあったが、それは学校との連携の一環に位置づけられているのか。実際やってどんな効果があったか、あるいはどんなことを期待してやったのか。

(荒井係長)

学校との連携事業としては、新潟市美術館は「ARTRIP」という形で行っており、作家を学校に連れていく事業は現在は行っていない。当館では学芸員が学校に赴き、事前授業で鑑賞の基礎をやったうえで、実際に美術館で鑑賞してもらおうという形である。コレクション展の無作為抽出のコーナーについて、今回、「美術の偶然!」というテーマで、技法上偶然の要素を使っている作品、例えば、デカルコマニーや作家が意図しない効果も取り込んだ作品を選んだのだが、それにもう一つ偶然の要素を入れようということで、学芸員ではない人に作品を選んでもらった。実は、こちらから働きかけたのではなく、近くにある新潟小学校の児童が職場体験で当館に二、三日来たのが、ちょうど「美術の偶然!」の準備中だった。

美術館の仕事の体験ということで、通常は看視業務やポスターの折り込みを手伝ってもらうのだが、今回は展覧会の準備をやらせてもらおうということで、例えば、作家が活着しているか亡くなっているか、作品が収蔵庫の1階にあるか2階にあるか、などのくじを引いてもらって無作為に選んだので、これに関しては学校全体への募集は行っていない。新潟小学校は近くの学校なので、子どもたちが今回の展示を見に来るなど、展示に関心を持ってもらう仕掛けにはなつたと考へている。

(島委員)

夜間開館はこれまでしたことはあるか。私も先ほど見たが、コレクション展はいろいろ工夫されている。企画展も建築、デザインからワイエスのような海外の作家、コレクションを活用した展示ということで、限られた予算の中で非常に工夫されていると思う。

二つ目のコレクション展について、抽象と具象という相対立する概念という説明があったが、最近、岡崎乾二郎さんが『抽象の力』という本を出して、非常に注目されている。予算が厳しいので難しいかもしれないが、コレクション展でもこういった人を呼んで議論するなど、なにか問題提起になることができるのではないかと考へる。

新潟美術館でやっている託児サービスは、新潟市美術館ではいろいろな事情でできないということか。

(高橋副館長)

託児サービスはできればやりたいのだが、当館にはそのためのスペースがなく、また安易な増改築もできないという制約から、やれていないという状況である。(市民から問合せがあった場合、古町のCo-C.Gビル内にある「子育て応援ひろば」の託児サービスを案内)

(島委員)

新潟美術館のほうはスペースがあるということか。

(横山館長)

ないのだが、やっている。(近接する建物を活用)

(田中委員)

新潟市美術館は、来年度4本のうち自主企画展は2本だが、「バウハウス展」は新潟市美術館が立上げ館ということで、かなり積極的に中心的に関わっているのではないかと推測する。これだけ自主企画展を開催するのはかなりの労力だと思う。巡回展を受けるだけではないというステータスの証でもあり、大変だと思うがぜひ頑張ってもらいたい。

四つ目の企画展は、副題に蔵出しコレクションとあり、かなりの所蔵品を活用しての企画

展と思う。所蔵品の活用は非常に大事であり、コレクション展でなく企画展でやるのはとても良いと思う。多分、作品を見るだけで終わってしまう人が多いと思うので、これがどんなに意義があることかということ伝えるイベントなどがあると、なおさら良いと思う。

少し関係するが、二、三年ほど前にこちらで市の2館と県の2館の学芸員のトークがあり、本当に良いイベントだった。美術館はこれからは作品を見せるだけではなく、美術館の使命を市民に伝えていかなくてはいけないと思う。理解してもらって市民から支えてもらえる。ぜひ今後もああいう企画をしてもらいたい。

最後に、両館で大学生のボランティアみたいなものはあるのか。

(荒井係長)

アートリンク事業に参加の4館の学芸員が語るシンポジウムは継続的にやっており、昨年は万代島美術館で、万代島美術館の開館15周年にちなみ、4館の学芸員がそれぞれ昔を振り返って話をした。来年度も、県立近代美術館が改修工事を終え9月にリニューアル開館するのに合わせて、リニューアルについて話をする企画が持ち上がっている。やはり、アートリンク参加4館のメンバーの中でも、好評だったということと、意外と知られていない美術館の仕事を伝える機会はとてもよいということで、登壇するメンバーを変えながら、現在、案を検討しているところである。

大学生のボランティアについては、来年度、バウハウス展で造形教育を取り上げるので、そこに学生を巻き込んでいきたいと考えており、田中委員のところへお願いに上がるかも知れない。よろしくお願ひしたい。

(田中委員)

長岡の県立歴史博物館で1年前に「守れ！文化財—博物館のチカラ、市民のチカラ—」という展示があった。そこまででなくても、展示として美術館の使命を伝える方法もあるのではないか。

(前山館長)

今年度、短い会期だったが「正・誤・表」という展覧会で、収蔵品だけでなく、展示用備品や学芸員まで展示したが、大変好評で、全国の学芸員がこれを見に遠路はるばる来館したり、SNSなどでも随分評判を得た。私も埼玉県立近代美術館にいたときに、美術館の裏側を見せる展覧会を何度かやったことがあるが、美術館の役割とは何かをふり返る展覧会をときどきやる必要があると考えている。

(田中委員)

大変楽しみにしていたが、出張のため見られなかった。

(田宮委員)

「インポッシブル・アーキテクチャー もう一つの建築史」も「バウハウス」も建築に関わりがあり、「ワイエス展」もオルソン・ハウスという家の絵が印象的なので、今年度は建物や暮らしを中心に展覧会を展開していくのだなと感じた。今、暮らしを丁寧にとり、住心地のよい家を造るということに多くの人が関心を持っているので、今の時代にとっても合った展覧会だと思うが、そういう建築や建物に関する企画展を続けて展開することに何か意図があるのか。

もう一つは、私は秋に東京の美術展に行ってきたが、有名な作品が出ていたので、人がものすごく多く、鑑賞したというより流れに沿って見たという感じだった。それはそれで充実感があったが、新潟の美術館はいいのか悪いのか、ゆったり鑑賞することができ、自分のペースで見ることができる。地方の美術館として、規模の大きな美術館とどのような点で差別化を図っているのか。

最後に要望だが、私は講座やワークショップに参加したいと思っているが、気がつくとも期日が過ぎていて、残念に思うことがとても多い。もう少しアピールし、告知してもらいたい。

(前山館長)

前半部分のご質問にお答えする。

建築に関わる展覧会を揃えようという意図があったわけではない。それぞれ開催する経緯が違っている。バウハウス展は、今年がバウハウス開校 100 年という年なので行われる。インポッシブル・アーキテクチャーでは、ザハ・ハディオの国立競技場のプランが展示されるのでオリンピックの年に合わせたいという巡回館があり、2019 年から 2020 年の開催となる。オルソン・ハウスが家だということはあまり考えていなかったが、言われてみれば確かにそうである。

業界ではブロックバスター展と言うが、ものすごいお金を投じて、ものすごい人が入るような展覧会、例えば、数億円投入して数億円回収するような展覧会は、東京や人口の多いところでしかやれないので、地方の美術館は乏しい予算の中で、みんなで手を組んでおもしろい企画を巡回させるやり方で、開催経費を抑えていく。そのため、1日に何万人も入るような展覧会ではないが、ゆったり見てもらえるという利点はあると思う。

(高橋副館長)

広報については、市報や区だよりなどの市の広報媒体のスペースがかなり厳しいため、ホームページ、フェイスブックその他や、共催する新聞社等の協力も得ながら、これまで以上にきめ細かくやっていきたい。

(茂木委員)

学校と美術館との連携で、美術館に出前授業や中学生の職業体験をお願いしているが、美術館のよさや鑑賞の仕方などではなく、美術館の人になるにはどうすればいいのかというキャリア教育的な職業講話を学校に来てやってもらえるか。

要望だが、学生や若い人を呼び込むということで、例えば今日のバレンタインやクリスマス、ハロウィンのときにインスタ映えする企画を、コレクション展でできるか。

(高橋副館長)

市民から要望をいただいた場合に、1時間ほど市政について説明する制度（市政さわやかトーク宅配便）があるので、その中でどのようなことができるのか検討したい。

(荒井係長)

学校からキャリア教育の要望や、公民館から講座の要望をもらっている。要望があれば、遠慮なくお声がけいただきたい。

提案いただいた、インスタ映えするような企画やバレンタイン企画など、おもしろいアイデアだと思う。特に次年度は、「かわいい！かわいい？展」があるので、ぜひかわいいものが好きな人たちにも訴えるような作り方を工夫したい。

ちなみに、毎年クリスマスに、L o u n g e Nで手作りオーナメントでクリスマスツリーを飾る「きままプログラム」をやっている。自分で作らなくても、かわいい、クリスマスっぽいと、美術館に来た記念に写真を撮っていく人もいるので、そんなアピールもこの冬からはやってみたい。

(中山会長)

開館時間の短縮について、私は万代島にある新潟県国際交流協会の理事長をしており、そこも午後6時15分まで開けていたが、5時過ぎはサラリーマンが日刊紙を読みに来る。そのために開けておくのはおかしいのではないかとということで、5時までにしたら、お金は浮くし、職員は喜ぶし、一挙両得だった。ぜひとも、少し抵抗があっても続けたほうがよい。

それでは、新津美術館への質問、意見はありますか。

(田中委員)

新津美術館では学芸員資格取得の実習（「博物館実習」）の際に、学生に常設展示室の企画をさせているが、とても良い取組みなので、それを拡大することは考えられるか。具体的には、小中学生に企画してもらった展覧会をする。かなりの労力は必要だと思うが、美術館の裏側を教えるという意味でも意義はあるのではないか。

(横山館長)

小中学生に作品の扱い方から教えて展覧会をやるのが果たしてできるのか、検討を要する。

(島委員)

昨年か一昨年に万代島美術館でチームラボの展覧会があったが、「魔法の美術館」はそれとは違うアーティスト集団が関わるのか。

(横山館長)

チームラボは大きな一つのまとまりだが、「魔法の美術館」は、デジタルアートの作家たち一人ひとりの手作りの作品で常時変化している。現在、出品される作品の半分以上はまだ制作中のため、内容をつかみ切れていないが、最新のものを展示することになる。12人から14人くらいの作家が出品するが、今、最前線で活躍している作家なので、当然、チームラボに加わっている作家もいる。チームラボでは作家の名前は出てこないが、「魔法の美術館」では作家が自分の名前を出して責任を持って一つの形を作り上げていく。子ども向けだが、実は大人が喜んで見ていく展覧会である。

(金山委員)

先ほど話題になった、新潟県立歴史博物館の「博物館のチカラ」という展覧会は、私の知合いが企画した。私も見たが、その展覧会では、博物館のミッションとは資料をきちんと収集し保管していくという博物館としての基礎的機能であり、そこをきちんと見定めようということを訴えていた。だから、今はやりの、社会に開かれているいろいろなイベントをやるというものとは少し文脈が違う。いわゆる博物館、美術館の基礎・基本的な話をあえて打ち出した展覧会で、それはそれで大変評価できる。委員から建設的ないろいろなイベントのアイデアが出たが、そういうイベントをいろいろ入れ替えていくというのは、私も大事だと思っている。やはり博物館、美術館は進化していくから、そこで社会、あるいは地域のニーズに合ったものに組み替えていくことは大事だと思う。

ただ、やってはいけないことは、どんどんイベントのメニューを増やしてしまい、博物館としての基礎・基本的な機能を圧迫することである。そこはくれぐれも気をつけてほしい。

質問だが、新潟市美術館の開館時間短縮に対して、新津美術館は月曜日隔週で開館していくという説明だったが、経費削減の面で全く反対の話だと思った。ニーズが高いこともあると思うが、新津美術館は職員の数がとても限られていて、隔週で1週間開けると、職員の配置のやりくりにだいぶ苦労するのではないかと思うが、業務に与えるよくない面での影響は

どのように考えるか。

(横山館長)

「あいてマンデ〜」は、隔週ではなく月に一度行っている。これは私の着任前からやっていて、託児もそうだが、非常に良いことなので継続している。お客の意見を聞くと、土日が休みの人ばかりではなく、月曜日に開けてもらえると助かるという声が一番多いので、継続している。正直に言って、予算が潤沢にあるわけではないが、そこはいわゆる企業努力しかない。託児は、保育士の資格を持っている人にその時間だけ来てもらい、経費も発生する。

(金山委員)

やらされているのではなく、前向きに判断してやるということですね。

(横山館長)

良いことはやるということです。

(大倉委員)

小島丹漾さんのコレクション展はとても良い。とてもいい作家なので、ぜひ紹介してほしいのだが、いつものコレクション展の会場でやるのか。とても狭いが。

(横山館長)

狭いが、そのつもりでやりたいと思う。

(大倉委員)

後で言うと言ったが、今言うことにする。要望ではないが、こういう発言も記録してもらうのは大事だと思うので。新潟市美術館の常設展示室は、前に私が勤めていた 1980 年代より 3 倍くらいの広さになったが、今日改めて見て、かなり狭いと思った。市にこういうことを常に発言し続けることが大事だと思っているが、今の新潟市美術館の常設展示はまだまだ狭い。新津美術館は常設展示室がないに等しい。年月をかけてコレクションを形成してきて、それを市民にひらくことは、美術館の大事なミッションである。改修して数年しかたっていないので、数年後にというのは不可能だと思うが、10 年後、20 年後でもいいから常設展示室を広げてほしいと、一人のファンとしていつも思う。テーマごとの展示もとても良いが、新潟市ならこれという人気作品が見られない状況にもなっているので、緩やかに展示するスペースと切口で展示するスペースの両方があれば、さらにコレクションが生きると思う。そういう意見を今後も市民の立場から言い続けていきたい。小島さんのコレクション展をもう少し広い会場で見たい。

もう一つは意見だが、最近、教育普及事業という言葉にすごく違和感がある。これは提案だが、名称を「交流事業」に変えて、美術館の学芸員や館長と、いろいろな作家や市民が、

企画展やコレクション展をきっかけに交流するという形の事業で考えていったほうが、これからの時代のイメージとしていいのではないかと思った。

(横山館長)

もともとそのスペースはなかったが、所蔵品を見てもらうためになんとかスペースを作り所蔵品展を行っている。平成 31 年度は、期間は短いが両室か片側の展示室を使って所蔵品の展覧会をやりたい。

それから、新津美術館は常設展の料金設定がないため、入場無料で行う。

(今井委員)

工芸をしている立場から、「あたらしいかたち新潟県人作家展 2019」を楽しみにしている。期間も2か月と長い、作品はどのくらい展示されるのか。

それから、移動美術館について、今年は期間が長くなったが、入場者はどのくらいか。

(横山館長)

「あたらしいかたち新潟県人作家展」は、すべて現存の作家で、洋画 30 名くらい、工芸 30 名くらいと考えている。国民文化祭の支援事業という形になる。

移動美術館については、先回の協議会で委員の方から、期間が2週間で短いという意見があったので、その後すぐ江南区の郷土資料館と話をし、平成 31 年度は3週間に延ばした。昨年は約 1,000 人の入場者があった。

(茂木委員)

新津美術館は新津鉄道資料館や県立植物園と連携していると説明があったが、チケットや料金などで、今のところどういうメリットがあるか。また、コレクション展「春・う・ら・ら」で花の写真や絵画を展示するとなっているので、県立植物園とコラボするのか。今、鉄道オタクが多い時代なので、鉄道資料館とコラボして、これからそういう人たちをねらったコレクション展をしていくことはあるか。

(横山館長)

割引のほうは、例えば、新津美術館のチケットを県立植物園や鉄道資料館に持っていくと入館料が2割引になる協定をお互いにしている。また、鉄道資料館が少し距離が離れているところもあるため、持っていくチケットは当日のチケットでなくてもよいことにしている。

「春・う・ら・ら」は、新津は花のまちであり秋葉区を盛り上げようと、春は花関係の展示をなるべくするようにしている。鉄道にちなんだ作品はそんなに持っていない。以前に松本零士展をやったときは鉄道資料館とタイアップしたので、そういう機会があれば、コラボ

もあると思う。

(田宮委員)

「魔法の美術館」がすごくおもしろそうである。子どもたちにもすごく受けがよさそうなので、ゴールデンウィークにやったらよかったのではないか。巡回展という構造上、この期間での開催になってしまったのか。

12月5日からの「所蔵品展」が、観覧無料と聞いてすごくびっくりした。少しでも入場料を取ったほうがいいのか。所蔵品展の料金設定がないからという説明だったが、お金が取れないのかという疑問がある。

(横山館長)

「魔法の美術館」の前の「ゲゲゲの人生展」がこの期間しかできなかったことと、「魔法の美術館」は夏にやったほうがいだろうと考えた。「魔法の美術館」は夏に全国4、5か所でやるが、各美術館ごとにやるものが違うので、新津のものは新津だけの展覧会になる。子ども向けという枠組みではなく、大人も喜ぶ展覧会になる。

常設展の料金は条例で設定されており、新潟市美術館は200円という料金設定がある。ところが、新津はもともと常設展の展示室がなかったので料金設定がない。今回は無料にしたが、将来的には、所蔵品とよそから借りた作品で一つの企画展にして料金をいただくことは考えている。

(降旗委員)

平成31年度の新津美術館の事業計画は、新津美術館のスタイルがすごくよく出ているラインナップだと思う。その中で「あたらしいかたち新潟県人作家展 2019」は、かなり力も入っている。新津美術館はアニメやメディア関係の展覧会が主体になっているが、ほかに工芸関係もよくやっているので、非常に重要なところだと思う。新潟には金属などの資源がたくさんあるが、なかなかそういうものはこちら側に見えてこない。私もこの委員になってから、随分回ってみて、鉄の文化やそういったものが非常に強いということが分かった。そういうことが美術と一緒に分かってくると、とてもすてきだと思う。新津美術館の近くには埋蔵文化財センターなどもあり、そういう資源がものすごくある。前にもそういう話をしたことがあるが、メインの美術の展覧会とそういう素材的なもの、歴史的なものが少し入ってくる展覧会。それもただ入れると説明的になってしまうので、デザイン的に処理していくと、もっと膨らみが出てくるのではないかと思う。そうすると教育の活動にもいろいろ展開できるのではないか。

「隠れた名品展」を私も何回か見ているが、非常に地味な企画だが、美術館の企画としてすごく大事なものである。今回6回目ということで、大変な蓄積がある。私の目黒区美術館に美術史探索学入門というシリーズがあったが、ネーミングが非常に受けた。「隠れた名品展」もそういうキャッチをつけて、美術館としてせっかくいい活動をしているので、6回目ということもタイトルにも出してよいのではないかと思う。

見せ方だが、いろいろなところで調査したことや、いろいろな隠れていたエピソードがパネルになっていたが、小さい字でごちゃっと書いてある印象がすごく強かった。もっとはっきりとしたパネルにして、それをしっかり読ませるといふ方向での展示構成ができると、ほかとのメリハリがついて、そういうエピソードを楽しむ展覧会ということ、地域を知ることにつながるのではないかと思う。

(横山館長)

取り入れられるところは取り入れていきたいと思う。「隠れた名品展」のタイトルについては、これまで協議会の中でも何度もご意見をいただいていたが、変えずにやってきた。この名称はけっこう真似をされている。サブタイトルをつけることも一つの考えだと思うので、取り入れていきたい。展示の幅を広げるという意味でも、サブタイトルを付けていくことは大変大事なことだと思う。

「あたらしいかたち展」について。県内にはいろいろな作家が非常に多く、大倉委員はそういう作家の展覧会を砂丘館でよく開催して紹介しているが、公共の美術館で紹介しているところはほとんどない。そういう意味では、やはり大倉委員が言うように、地元の作家も大事にしていかなければいけないし、これから育てていくことも必要だと思うので、折に触れてこういう展覧会はやっていきたい。

(東村委員)

いい意味で両館の差別化が図られていると思う。いろいろな意見は出ると思うが、ぶれずに進んでもらいたい。

新津美術館の託児について、秋葉区は子育て世代にやさしい取組みが多いといわれているので、それが美術館の使命かどうかということもあるが、新潟市が今、全国に打ち出している移住定住にもつながる良い取組みだと思う。ママさんたちからは安心して預けて見られると聞いている。それが観覧者数につながるかは分からないが、続けていくことも大事だと感じている。

「隠れた名品展」は、私も非常にいいと思うが、西蒲区だけでは分からないので、今回が第6弾だということを入れてほしい。過去、第1弾から第5弾までこのようにやってきたと

いうことを、簡単でいいので冒頭に紹介があると、美術館がやってきたことがわかると思う。

「魔法の美術館」は、前回、私も行き、話題もたくさんで楽しかった。ワークショップで、紙で作る「キラキラ★モビール」というのがあるが、きらきらと聞くだけでわくわくして行きたくなるが、モビールというのが伝わるのかどうか。動く彫刻というか、飾るものだと思うが、今後、発信するときに伝わりやすくしてもらいたい。

広報について、フェイスブック、ツイッターの充実を図るとあるが、非常に大事なことだ。私も見ているが、頑張っていると感じている。その中で一つ、また仕事を増やしてしまうようだが、学芸員が現場に行ったり、いろいろな研究をしていることや、金山委員から話があった美術館の使命など、なかなか一般の市民には伝わりにくいところを、分かりやすく SNS で発信できないか。今は動画も載せられるので 20 秒ほどで、美術館は資料も集めなければいけないとか、学芸員はこういう仕事もやっているということを、分かりやすく、言葉で、動きで、生の声で発信できたらとてもすてきではないか。やるのは大変だと思うが、気軽にやってみるといふことも一つだと思う。

フェイスブック、ツイッターは手間もかかって大変だと思うが、反応や手ごたえを感じているか。

(横山館長)

SNS はまだ始めたばかりなので 170 名くらいだが、確実に、徐々に増えているので、これをもっと増えれば良いと思う。美術館の使命というものを SNS の形で発信するのも一つの方法だと、委員のご意見を聞きながら思った。使命というものを形に表して発信するのはなかなか難しいが、非常に貴重なご意見だと思う。

(中山会長)

私が新潟県内の美術館の中で一番行く回数が多いのは、新津美術館である。駐車場もあり、もっと行きたいのだが、なかなか難しい。

コレクション展の、小島丹滢をまとめてやるのは今回初めてではないだろうか。そういう意味ですばらしい企画展になるものと期待している。

「隠れた名品展」については、「隠れた」ではなく、そこの区の「優れた作品展」ではないかと前から言っている。もうブランド化しているので仕方ないと思うが、最初に聞いた人には意外に抵抗感がある。

企画展、コレクション展の二つは期待している。

(2) その他

(高橋副館長)

ひと言、補足をさせていただきたい。これまでの協議会の中で委員の皆様から、夏場少し寒いという方に貸し出すショールや、冬は膝掛けとして使えるものをというご意見をいただいた。少し時間がかかったが 30 枚ほど用意できたので、ここにサンプルをお示ししてご報告する。

(大倉委員)

私の、地域の作家を大事にしてほしいという意見の意味について。私は作家の立場ではないし、また、団体展や市展、県展もほとんど足を運ばない人間だが、画廊や砂丘館のような施設を運営する中で、フリーでやっていて非常にいい作家が新潟には多いと感じている。もちろん団体展に出している方にもいい作家さんはいるが、そういう作家たちを紹介することで、今、同じまちに住んでいる中で、こういう動きが起こっているということが、見る側から分かるということが、とてもいい意味で、新潟に対する、自分がそこのまちに住んでいるという気持ちをすごく深めてくれるという意味で言っているということの一つ付け加えたい。

また先ほど、「明るい色」で名前を挙げた馬場まり子さんは三条市在住で、ひたすら東京で個展をされてきた 70 代の方で、最近、求龍堂から『ピンク幻想』という大きな画集を出したが、そういう方がいるというところが、やはり新潟のおもしろいところだと思う。

もう一つ、先日、新潟絵屋で新潟市美術館の実習室を借りてリトグラフの講習会をしたが、非常に好評だった。良い施設があるのに、実習室や機材があまり使われていないのではないかと思う。人員の問題もあって、今の職員でそれをやるのは難しいと思うが、先ほど、交流事業と言ったが、それこそ新潟市の美術協会などで長年作家として活動している方々がいらっしゃるし、先ほど、高齢化の話もあったが、今、若い方との交流がなかなかできていないという悩みを抱えているようなので、市の美術館にも全面的に協力してもらい、そういう作家の方々と若い方々の交流の場として実習室を活用するとすごく良いのではないかと思う。先日、一日使ってみたがいい部屋だった。八木なぎささんという女子美術大学短期大学部の准教授に講師をしてもらって、先生も素晴らしかったし、15 人くらいの参加者のうれしそうな表情が印象的だったので、もっと実習室を地域の作家の方々と協力して、それこそ交流して活用するととても良いと思った。

(東村委員)

先日、打ち合わせでこかげカフェを使ったが、打合せ相手の方からどうしてもこれだけは言っておいてくれと言われた。新潟市美術館は前川國男の設計だということをもっとアピー

ルしたほうがいいのではないかと。これは一般市民の声だが、もったいないと言われた。

もう一つ、先日ショップで買い物をし、プレゼント用に包装してもらえないかときいた。わがままなお願いだということは分かっているが、すてきな作品やグッズが多いので。新潟市美術館のショップでは、たしか、包装してもらうことができたが、新津美術館はそのシステムがないので美術館のシールを貼るだけでいいかと言われた。簡単でいいので、リボンとかがあったら女性にやさしいと思った。

最後に、この協議会をぜひ新津美術館でも開催してもらいたい。

(中山会長)

いろいろなご意見をいただき、まことにありがとうございました。いただいたご意見について、事務局でさらに検討してもらいたい。

以上をもって、本日の議事は終了する。

5 閉会挨拶

(前山館長)

本日は、長時間熱心にご議論いただきありがとうございました。本日、いただいたご意見を両館の運営に反映させていきたい。今年も活発な、にぎやかな美術館となるよう努力したい。これからもご指導をよろしくお願いします。